
黒色な私、桃色な妹と親友

甘味処

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒色な私、桃色な妹と親友

【Nコード】

N8156Z

【作者名】

甘味処

【あらすじ】

女主人公がファンタジーな世界に転生。前世の知識と主人公は転生後の妹と親友と平和に過ごすために…とりあえず国を乗っ取る話

本作品は、「女性が主人公」、「ファンタジー」、「主人公最強」、「百合」、「転生」、「ハーレム(2人)」、「主人公が黒い」、「妹と親友が桃色(頭の中の的な意味で)」などの要素が含まれます。

また、作者の処女作であり、努力は致しますが様々な不備があると

思われます。

感想はもちろん。アドバイスを、ご指摘なども頂けると嬉しいです。

以上の事項に不快感などを感じるかたは本投稿をお奨めはできません。

01 - 主人公誕生 - (前書き)

本作品は、「女性が主人公」、「ファンタジー」、「主人公最強」、「百合」、「転生」、「ハーレム(2人)」、「主人公が黒い」、「妹と親友が桃色(頭の中の的な意味で)」などの要素が含まれます。また、作者の処女作であり、努力は致しますが様々な不備があると思われます。

以上の事項に不快感などを感じるかたは本投稿をお奨めはできません。

..... 最初の記憶、それ
..... は深い青色の世界。

空間に満たされる青い色は、幾重にも折り重なって、その色を深くしている。
気がついたら、私はそこにいた。

深い、深い青。

ここがどこなのだから、分からない。感じ取れることは視界を埋め尽くす青色とやけに響く音のない音。

足は地に着かないが、ゆったりとした重力を感じる。

その後、口から吐き出された言葉は、意味がないまるで「赤ん坊」のような泣き声だった。

01 - 主人公誕生 - (後書き)

意味が分からない方へ、本投稿文は簡潔に言おうと

「一度死んだ主人公が前世の記憶の初期化を完全にする前に生まれ変わってしまった」

という内容です

02 - 黒い主人公 リア 7才 - (前書き)

第一話の投稿日を見てくれ。

うんそうなんだ、クリスマスだったんだ。

なぜ暇だったのかはあえて言わないが、暇で暇でしようがなくってつい投稿してしまったんだ。

書きだめところかプロットさえ作っていない始末。方向性だけは今話作成しながらきめたけど、作者でさえ展開が見えない。

注：今回絵を描いてみました。

小説と同様、絵もネット上で公開したのは初めてです。

嫌な予感がした方は挿絵表示機能をOFFにしてください。

まずはこの世界の説明に入ろう。

この世界における大陸は分かりやすかつたひとつ。

とはいえ世界全てをくまなく調べつくされたわけでもなく、大陸のひとつやふたつ後々発見される可能性もあるが。

私が生まれたこの国は東西南北の領土をそれぞれおさめる4家の領主と中央をおさめる王族で成り立つ。

文化レベルは中世におけるヨーロッパ程度、国の公式的な宗教として精霊が崇められている。

だが、なによりも特筆すべき点は”魔法”と”魔物”が存在するのとだろう。

そう、この世界はファンタジーな世界だった。

そんな世界に生まれた私の名前はリア・グレンジャー。
南の領主の娘として生まれた。

現在7才。黒髪に黒い瞳。容姿は整っている方だが、無表情・寡黙な性格が打ち消している。

そして、ここではない「魔法が無く、科学が発達した世界」における前世の知識を持つ。

が、持っているのは前世の世界における知識であって、前世の私の記憶ではない。

つまり、輪廻転生において私は人間の記憶におけるエピソード記憶のみ消去され、意味記憶は初期化されなかったようだ。

具体的に例をあげると、義務教育的な知識や、前世に読んだであろう本の内容などの記憶はある。

しかし、私がどのようにそれらの知識を得たのか？自分の前世の名前は？どのような人物だったのか？などは全く思い出せなかった。

自我は生まれた瞬間からあったが、生きてきた思い出などなかったので精神と肉体の年齢差で戸惑うようなこともなかった。

だから、赤ん坊として扱われることにも知識から自分の年齢ならば相応の対応をされていると感じたのみだった。

だが、前世の記憶を持つ私が全く問題がないというわけでもなかった。

その問題とは自分の生に対する実感がなかったことだ。

ここでは説明は省くが私の特異な”能力”も関係しているのだろう。魂と肉体がかみ合っていないというか、今の人生はなんだかゲームでもしている気分だった。

この世界で、働いてる人を見ても、談笑している人を見ても、死人を見てもまるで映画のワンシーンでも見ているようで、

私だけ、世界から浮いていた。

希薄な現実感に私は生きる意味を見出せず、ただ平凡に生きたいとだけ考えていた。

だが、この世界は私の平凡な人生を許してくれないらしい。

中央の都市では幼い王子を亡くしてしまった王様が抜け殻のようになり、

代理を行う宰相が好き放題やったことによる政治の腐敗。

政治の腐敗と共に、隣国との外交状況はどんどん悪くなる。

周辺国が団結して攻めてきたと聞いても、ついに来たかと思えない状況。

近年、活発になってきた魔族の存在。

身体能力の面で大幅に人間を上回る彼らによって、人的被害は増え続ける。

当然のごとく国は動かない。

それらの情勢は南の領主の娘として生まれた私にとっても他人事ではなかった。

特にグレンジャー家がおさめる南の領土は魔族との戦いで男性の死亡率が特に高く、

その被害は農家の生産性に直結し、変わらない上納金を求める国の要求と相まってかなり頭が痛い問題となっていた。

父は無能ではなかったが、そもそも国自体が滅亡に向かっていく現状、しだいにグレンジャー家もまた傾いていく。

いくらゲームのような世界における親でも、日に日にやつれていく領主である父の姿は良心が痛む。

どうにかしてあげたいと感じた。

私は価値を見いだせずにした私の現実感のないこの人生を父の、グレンジャー家のために捧げてみようと考えたのだ。

だからこそ、将来必要な知識を得る努力を理論的に考え、効率よく実行した。

2才になるまでに会話、文字の読み書きなどは2才までに習熟し、以降様々な本を読み漁った。

5才になるまでに魔法を扱えるようになった。

もちろん前世の記憶を持つ私にとって、現状のグレンジャー家を建て直す案はいくつかあったが、
所詮は異世界の知識。そのまま適用できるわけもなく、いくら論じたところでその効果を信じさせることはできない。

なので、政策の裏付けのための実証的な実験のために信用できる人間を何人が雇い、実証という主産物以外の副産物を資産にいくつかの組織を私個人が持った。

ほぼ幼少期は知識の補強、政策案と個人的な組織の作成に費やした。

そんな私の友人関係はやはりというか、ほぼ壊滅的な状況だった。そもそも遊びに使うような時間がとれないことや、交渉以外の素の私が無表情・寡黙であることが起因しているのだろう。

そもそも、遊ぶなんて非効率な作業に何の魅力も感じられなかったのだが…

………
……… だけれども、私が独りになることは
……… ない。なぜなら、
………

「りあ姉さま。お昼ごはんのじかんだって」

ノックもなしに私の部屋に入り込んでくる人物。ベッドの上で座り読書をしながら考えごとをしていた思考が浮上する。

双子の妹のノアだ。

容姿は私とすりふたつ。…表情は180°違うが。どこが気に入ったのやら、こんな私に好意を抱いてくれている。

本来、双子の妹とて、私にとって画面上で動く別世界の人でしかなかった。

だが、私が5才の時に起こった事件で私が私であると実感させてくれた大事な存在だった。

「姉さま？ごはんだよ？」

返事をしない私を心配したのだろう。私と本の間に入り込み私の瞳を覗き込んでくる

頭をなでると気持ちよさそうに目を閉じ、胸に顔を押し付けてくるノア。

最近癖になったと自覚しだした妹の撫で心地に夢中になる。

ノアの呼吸はしだいにゆっくりとなっていく。

「…眠いの？ノア？」

「うん…」

問いかける私の声にノアは意味の通らない呻き声をもらすだけ。私の表情は相変わらずほぼ固定されているが、少しだけ目を細めているような気がする。

ゆっくりと流れる時間はノックをする音によってずっと元の流れに戻る。

「リア？ご飯が冷めちゃうよ？ってノア…。ぼくは君にリアを呼びにいかせたんだが…何で寝ているんだい？」

規則正しいノック音の後に入ってくるのは親友のエル。彼女もまた、私が私であると実感させてくれた大事な存在だった。

ぼく。なんて自分のことを言っているがれっきとした女の子で年は私たちと同じだ。

前世の知識から彼女のような娘を「ぼくっこ」というらしい。

「…わかった」

「ん…ごめん。」

声は小さいがしっかりと返事をする私。その後寝むそんな妹の声が続く。

そのまま、ベッドから腰をあげ、自然な動作でエルを抱きしめる。

「リッリア？」

「…羨ましそうにしてたから。」

焦る親友は普段の理路整然な言葉を失う。けれども彼が聞きたいであろう私の動作に対する端的な理由を述べる。

狼狽している親友をしつかり数10秒抱きしめた後、体を離す。そのまま部屋を出ようとする服を引っ張られる感覚を感じる。

「…？」

「姉さま。…私も」

「…ん。分かった。」

ちよこんと服を引っ張る妹に無表情のまま苦笑し、抱きしめてあげる。

背中に感じる親友の羨ましげな視線。…しまったエンドレスだ。

だが、やめようとは思えない。私は妹と親友を交互に抱きしめ続けた。

結局、それは私のお腹がなくなってしまっまで続いた。

.....なぜなら、私には大切な妹と
親友がいるのだから。.....

きっとあの最初の記憶での、水面のきらきら揺れる光はこの2人だ
ったのだろう。

最初は単なる父への憐みから決意したグレンジャー家の建て直しは

今では自分自身の強い決意もあつた。
グレンジャー家が滅びれば私の大事な2人ともが不幸になるからだ。

だが、それには腐敗した国が邪魔すぎる。今現在降りかかっている
グレンジャー家の困難は
国が正常に動作すればそれだけでほぼ解決する。

リア・グレンジャー5才。私はこの日、裏から国を操ることを決意
する。
表情はやはりなく、だけれどもどこまでも黒かった。

> i 3 7 8 3 7 — 4 7 4 8 <

02 - 黒い主人公 リア 7才 - (後書き)

意味が分からない方へ、本話は簡潔に言おうと

「魔物がいて魔法があるヨーロッパ中世な世界に転生した主人公は妹と親友が愛おしくてつい腐敗しかけている国を乗っ取っちゃうの」という内容です。

絵頑張った。

03 - ピンクな妹 ノア 7才 - 前半（前書き）

投稿・更新情報を目次に追加しました。

次回更新情報も載せてあります

03 - ピンクな妹 ノア 7才 - 前半

03

- side : 妹 -

くうー、と姉さまのお腹が鳴る。

そこまで広いとは言えない部屋だ良く響く。

私とエルは姉さまをじーっと見る。

姉さまはじっと見返した後、すーっと視線をそらした。

姉さまかわいい…。

思わずにこにこしてしまっていたが、姉さまを呼びに来た目的を思
い出す。

私とエルは姉さまの手を引っ張ってお昼ごはんを食べるために部屋
に向かう。

「姉さまを連れてきた」

「遅れました。リアを連れてきました。」

「…来た。お腹すいた。」

「つむ」

お父様に声をかけてから席に着くとメイドさんが食事を用意してくれる。

端的な姉さまの言葉に空腹加減が良く伝わる。

姉さまの前に家に仕えているメイドさんがサンドウィッチの入った皿を置く。

その皿がテーブルに載ると、皿にはサンドウィッチが無かった。

…別にサンドウィッチが虚空に消えたわけでは無く、姉さまの手が空中でつかみとっただけだ。

我が家の日常的な食事風景なのだが、メイドさんは目を丸くしていた。…新人さんかな？

姉さまは細い外見とは異なり、かなりご飯を食べる。

そのまま、姉さまはサンドイッチにかぶりつき勢いよく食べ始めていた。

私も食べ始める。今日のお昼はサンドウィッチにスパゲッティだ。

ちらりと見ると、姉さまは口いっぱいスパゲッティを頬ばっていた。

姉さまはいっぱい、勢いよく食べるけど、お行儀が悪いという印象はあまり抱かせず、ちゃんと良く噛んで食べている。

がつつではなくもきゅもきゅ?とでもいい表わせるような食べかたをしている。

姉さま食事を楽しそうに食べる。

表情からは読み取れないが雰囲気で分かる。

姉さまの感情を読み取ることができるのは私以外にはエルだけだろう。

そんなエルは姉さまのこぼれたパンくずを取ってあげていた。

姉さまにまっすぐ見つめられてお礼を言われて頬が赤くなっている。

そんなエルの表情には気付かずに姉さまは食事を再開、

姉さまの小さな口いっぱいサンドイッチを詰め込んで、ほっぺたを膨らませた。

姉さまかわいすぎる…

こんな可愛い姉さまだが、基本は黒い。

先ほど抱きしめてくれた時も、何か黒い、悪事を考えていることを感じとれていた。

世界征服でも考えているのだろうか？…姉さまならありえる。まあ、日常茶飯事だから気にしないが。

ただ、食事をしている時は黒いことを考えていないようで、無心で感情のままに食事を楽しんでいる。

姉さまは無表情とその黒さのせいで一部の人を除きあまり良く見ら

れていない。
というか怖がられている。

聞くところによると姉さまの黒い瞳の深さは何百人もの人を殺すような大量殺人者に匹敵するらしい。

…そもそもそんな殺人者いるのだろうか？

けれども、食事の時における姉さまの可愛さは万人共通らしく、皆暖かい視線を送っている。

みれば、バスケットを奪い取られて目を丸くしていたメイドさんも姉さまの食事風景をニコニコと見ている。

以前いつそ一日中食べていればいいのではいかと姉さまに言ったことがある。

それでは動けなくなってしまうとのこと。

丸々と太ってしまった姉さまを想像し、そうなくても自分が養うことを告げると

ほっぺたを両手で引っ張られた。

今でこそ、私とエルには心を開いてくれている姉さま。
だけれども、昔の、正確には5才までの姉さまは心を閉ざしていた。
心を閉ざすと言っても別にひきこもっていたわけではない。

当時から私にやさしく、妹として自分を大事にしてくれていた実感がある。

頭もよくて行動的で、皆に内緒らしいがすごい魔法も使える。
姉さま自信にはなんの不満もない。

だけれども、姉さまが作り出していた世界に対する壁のようなものには腹が立っていた。

その壁が少なくとも私達に対して解消されたのは姉さまが5才の時に起こった事件が原因だった。

その年は姉さまが領主になるための行動を裏だけでなく表立って開始した年で、

その事件とは、南の領土の村近くの森の魔物退治だった。

「ゴオアアアアツ!!？」

断末魔を上げる魔物。

猪が巨大化したような魔物が一体だけ、と言えば大したことがなく聞こえるかも知れない、

しかし駆逐されることなく長い年月を有して成長したその巨体は四本足の状態でなお成人男性の3倍ほどの高さにもなるまさしく化け物であった。

毛皮と牙は魔力を有している。

まず毛皮は所々で濃淡が異なる茶色であり、魔力により強化され、弓矢どころか並みの魔法ですら弾く。

牙は自然生物のものとしては不気味なほどに白く、

その巨体を生かした突進力を付加すれば人など触れただけで粉々になってしまうだろう。

人間風情が戦うにはそれこそ戦闘訓練を積んだ騎士か、国が保護する魔法使いの集団を派遣することになる。

少なくとも、数を揃えても一般人に敵うような存在では無い。

…はずだった。

猪は巨大な穴に足を取られ絶対の威力を有した突進は封じられ、さらに何重にも体に巻きつく強靱な網によってほぼ完璧に身動きを

封じていた。

とはいえ魔力を有した牙にかかれば、強靱な網とて数瞬しか身動きを封じることなどできない。

足を封じているのも所詮は穴だ、溢れるほどの筋肉から放たれる脚力に抜け出せぬはずはない。

破られるのは時間の問題だった。

しかし、その数瞬で猪は丸太大の木の杭を幾重にも受け、頭部をさしぬかれた瞬間、魔物は死に絶えた。

複数人で扱えるよう、木の杭には持ち手として縄が巻きつかれていた。

そして木の杭を持ち、魔物を刺し貫いたのは村の男たち。

そう、巨大な魔物はたかだか”村人”に敗したのだ。

未だ自分たちがこんな化け物を倒したのが信じられないのか、村人たちの茫然とした雰囲気の中、

光が失われていく魔物の目の先には、当時5才のリア姉さまが悠然と立ち、魔物を見下していた。

03 - ピンクな妹 ノア 7才 - 前半（後書き）

上でも述べましたが、投稿・更新情報を目次に追加しました。

そこで次回予告で30日までに投稿とか書きちゃったから、バイトとの兼ね合いで死にそうに…

今回の話は簡潔にいうと「主人公リアの妹ノアは姉が黒いの知ってるけど、受け入れている。そして親友のエルも含めた3人の関係の転機となる事件の回想突入」といった感じですよ。

回想に突入したまま後半に続きます。

04 - ピンクな妹 ノア 7才 - 後半(前書き)

あけましておめでとございます。

本編は前回の「03 - ピンクな妹 ノア 7才 - 前半」の
後半です。

前回は親友のエルも含めた3人の関係の転機となる魔物の狩りの回
想に突入して終わりました。

本編はその続きで回想に入ったままで始まります。

「姉さま！」

思わず姉さまに飛びつく。

「怪我は！？大丈夫！？」

「…大丈夫。それに戦ったのは村人。私は魔物をなぶり殺す戦術の成功を確認しにきただけ。危険は無かった。」

いつも通りの無表情な姉さま。

姉さまはいつもたんたんと、全て見通したようにどんなことでもこなしてしまう。

その奇抜な発想と行動に反対する人もいたが、後になればなるほど姉さまの行動が正しかったのだと証明される。

そのたびに反対していた人達の表情は驚愕に変化していった。

変わらないのは姉さまの表情だけで、

そんな姿を見てきた私にとって姉さまの変わらない表情は最も信頼できる証左だった。

「そっかー。さすが姉さま。真っ黒だね！」
思わず顔がほころび、安堵する。姉さまの言うとおり、危険はなかったのだろう。

私の自慢の姉さまが言ったことならば間違いはない。
…言っている内容は黒いけど。

「…」

押し黙ってしまったエルに少しだけ不安な感じがしたが、無理を言
ってついて来る必要もなかったかもしれない。

そんな風に思考しているとランスさんがやってきた。

「リアお嬢様。魔物の死亡を確認いたしました。処理をお願いいた
します。」

ランスさんは元々は中央の都市にいた国直属の騎士で、騎士を引退した後、父さまに雇われたらしい。

でもなぜか今は姉さまの師匠兼部下で姉さまに忠清を誓っているけど…

元とはいえ騎士の忠清は高潔なものらしく、単純な雇用関係を表すものではない。

雇った父さまに対してもランスさんは忠清を誓ってはいない。

忠清とは、主のためならば自害さえも厭わないとても重いもので、初老に入りかけていたランスさんでも姉さま以外に忠清を誓ったのは国そのものしかないらしい。

不思議に思った私は姉さまにランスさんが忠清を誓うまでに至った顛末を聞くと”ないしょ”と言われた。

人差し指を口の前に添えながら言う姉さまの姿は様になっているけど…やっぱり黒かった。

「…分かった。」

そんなランスさんの言葉を聞いた姉さまが魔力を行使する。倒れ伏した魔物を中心に白く発光した幾何学的な魔法陣が地面に描かれる。

そして魔法陣の光が魔物に集まり、魔物自身が発光した。

光が収まった時に…特に何も変わっていなかった。

「姉さま。何をしたの？処理って？」

「…今日の夜ご飯はあれ食べるから」

「あれって…魔物を食べるの？」

思わず疑問を投げかけた私に続き、姉さまの返答にエルも疑問を持ったようだ。
姉さまはランスさんに魔物の肉を捌く陣頭指揮をするように指示を出す。

「魔物って魔力の集まる部位以外は消えるはずだけど？」

魔物は死ぬと部位以外は消滅してしまう。
先ほどの猪風の魔物でいえば魔力のこもった毛皮か、牙のみが残る。
いくら捌いても、死んでから10分もしたら、消滅してしまう。

「…魔物が消えるのは魔物が持つ魔力の特性のせい。」

姉さまが言うには魔物の魔力は特異で、なぜか死ぬとその体から残らず散ってしまうらしい。

この世界のものには全て魔力が無いとその存在が消滅してしまう。
だが、魔力の濃度が高い個所は消滅せずに残りそれが部位と呼ばれる。

先ほどの魔法は空気中にある魔物以外の魔力を消えていく魔物の魔力の代わりに魔物の体を集めることで他の部位の消滅を防ぐ魔法らしい。

今まで魔物は倒すには村の戦力程度では不可能で、仮に倒したとしても残る部位は少なかった。

部位は魔力が強く残り魔道具などに用いられるが、供給が不安定なので、

あまり加工が商業として発展しておらず売れたとしても二束三文で買いたたかれてしまう。

魔物は倒しても収穫が少なく、度々村を襲う害獣だった。

「ただ、

…これから魔物は害獣から狩りの対象になる。

魔物の食用の肉は村のものと認める代わりに、

魔力のこもった魔物の部位はグレンジャー家に安価で納品してもらう契約をした。」

なるほど、と思う。これほど大きな猪の魔物だ。普通の猪の何倍も食料事情を改善するだろう。

さらには安価でも買いたたかれるよりはましな金に換えてくれるのなら村としても文句は出ない。

そして魔道具の加工のネットワークを有するグレンジャー家ならば、莫大な金に変えることができる。

村人達は集団で狩りを行う方法を知った。

危険だが、猪をかるよりも何十倍分の食料肉を手に入り、さらに金まで入るならばこれからも魔物を村人達は狩り続けるだろう。

リア姉さまが何もしなくてもグレンジャー家の財政は潤っていく。

「姉さまは悪どいねー」

「…ふっふっふ」

姉さま、無表情で笑うのやめて。棒読みにしかな聞こえない。

「嘘だ。」

エルの言葉で空気が止まった。

「…何が？」

「今回の狩りでリアが何もしなかったなんて嘘だ。君は魔物をおびき出すという意味でも、村人を動かすという意味でも生贄だったんじゃないか？」

「ね、姉さまが生贄ってどうゆうこと!？」

エルの口から発せられた不穏な言葉におもわず反応してしまう。

「魔物は魔力を有する獲物を好む性質がある。魔力が弱いとはいえ魔法を習ってさえいない村人よりは畏に引き込むための生き餌としては優秀だろうね。」

村人達もリア自身が生き餌となる作戦を示すことで、魔物を村人だけで倒すなんて夢物語を納得させたんだろうね。」

「…」

姉さまは、何も話さない。

「ねえ、もし村人が失敗したり、土壇場で怖気づいたらどおするつもりだったの？あの時、魔物が狙っていたのは間違いなく君だよ？」

「…魔力の障壁を貼るつまりだった。」

「あの牙に貫かれたら障壁なんて貫通してたね。君ごと。牙以外だったとしても君の魔力じゃ防ぎきれない。死ぬつもりだったの？」

「…衝撃を逃がす方法、致命傷を避ける方法は「知っている」。…HPが1でも残っていたら、もとの戻る全回復できるんだ。問題はない。」

瞬間、私は血が頭に昇って沸騰した。

護身用の小刀を取り出し思いっきり自分の手の甲を突き刺した。目を見開くエルとこんな時でも無表情な姉さま。

そのまま、もう一度刺そうとすると、姉さまがとびかかってきて小刀を奪い取られる。

「…何をしているの、やめなさい。」

私の傷が白く発光した。エルの回復魔法だ。姉さまの言った通り傷一つ残らなかった。

「ノア？なんでそんなことを？」

エルも私の突然の自傷行為を攻めるような表情をしている。だから私は、

「なんで？回復できるんだから、問題はないでしょ？」

姉さまの瞳を覗き込んで言った。

私が初めて向けた怒気に姉さまがひるむ。

「…ち、違う。私とノアは違う。」

「同じ。だって双子だよ？私も姉さまが後で治ったとしても傷なんか負って欲しくない。」

困まった感情を示す姉さまを抱きすくめる。

「…だって、この体は本物じゃなくて、偽物で、私はここにはいないよ、」

抱きしめるっていると姉さまは言葉をこぼす、だけどそれはいつもの断言するようない力がない。
エルも私ごと姉さまを抱きしめる。

「リア、僕は君の悩みは分からない。けど君は、ここに生きているよ。だってこんなに暖かいじゃないか。」

そんな私達の言葉に姉さまは、やっぱり無表情で、

だけど小さくつぶやいていた。

「…私は、この世界に、生きて、いる。」

***** 回想終了*****

それから、私とエルは良く姉さまを抱きしめるようになった。

私達を感じとって、姉さまに自分がこの世界に生きているんだって
もっと感じてもらいたいから。

抱きしめる度に、なんだか姉さまが近くに來てくれるように感じた。

最近では姉さまからも抱きしめてくれたりする。
私達としても姉さまに抱きしめてくれることは嬉しいから、喜んで受け入れている。

あの時以降、私の姉さまに対する見方は変わった。
自慢の姉という所は変わらないが、姉さまは完璧な超人なんかじゃなくて、とても脆い部分をもっていると分かったから。
姉さまの脆い一面を見てしまって以降、姉さまが可愛くて可愛くてしかたがなくなってしまうた。

視線を感じ、ふと顔を上げる。姉さまの熱い視線。残念ながらその視線の先は私だけでなく私のサンドウィッチに向かっているが。

そうだ、昼ごはんを食べてたんだった。昔の回想をしていてぼーっとしていた。

姉さまの皿はもう空っぽで、姉さまは私とエルの皿を物欲しそうにちらちらと盗み見ている。私とエルが向けている視線に気づくと、姉さまはびくっとした後、すーっと視線を横に逃がす。さっきも見たけど姉さま特有の恥ずかしさを表す表現だ。

やっぱり、姉さまはかわいすぎる...

もうこれは結婚するしかない。
しかし姉さまは私達を大切にしてくれているけど、向けてくれる感情は家族としての親愛みたいだ。

だけど、姉さまには悪いが私とエルはそれだけでは満足できない。

別にエルと姉さまを取りあうわけではない。エルは姉さまにとっての親友だが、私にとっても親友だと思えるからだ。

それに姉さまが心を開いてくれたのだから、エルが姉さまの考えを見抜いてくれたからで、尊敬もしている。

そう、目指すは私とエルと姉さまの三人でらぶらぶな生活！

3人、しかも全員女性で結婚なんて認められないのでは、と考えていたがエルがなんとかしてくれるらしい。

なんとかかってなんだと聞こうかと思ったが、黒く笑うエルに言葉が引っ込んだ。

頭がいいしエルも対外、黒いような気がする。

なので、後は姉さまの好感度を上げるだけだ。
これもエルの発案で色んなことをしている。

例えば今姉さまが私達のお皿をちらちら見ているのだったってエルの作戦のひとつによるものだ。

私達3人の料理は平等に盛り付けている。盛り付けの担当は私だ。だけど、そもそも食べる量が違うから、姉さまには足りなくて、私達には少し多い量となる。なぜ最初から、姉さまの料理の量を多くしないかということ

「姉さま？」

「…何？」

「あーん」

「…あーん。」

これのためだ。

エル曰く、食事を分けあって食べることは、関係を進展させる。さらにはこのあーんも新婚の夫婦が行う動作らしい。かわいく口を開けて待つ姉さまがかわいくて私も気に入っている。

以前間違えて食べかけのサンドウィッチを渡してしまったことがある。

食事中の姉さまは食べることに集中しているので、私が気付いたと

きには姉さまにサンドウィッチは頬張れていた。

エルが言うにはそれは間接キスといい、それを日常的にすればそれ以上の行為、

例えば口と口のキスなんて行為のハードルを下げることができるかも知れないなんて言っていた。

さすがに、恥ずかしくて故意にはしようとは思えなかったが…。

もちろんエルに頼ってばかりではない。私発案の姉さまとの関係を深めるための作戦として最近料理を習っている。

姉さまは自分で思う以上に食ねることへの執着が強い。料理長が知らないようなメニューをいっぱい知っているほどだ。

胃袋さえつかんでしまえば、姉さまは離れなくなる…はず。

それだけじゃない、姉さまは将来領主になる。その補佐をできるように勉強も努力している。

昔から姉さまについて行って本を読んだりしていたのでこれについてはそこまで苦労はしない。

今後も私は歩み続ける。

全ては私とエルと姉さまの桃色で、らぶらぶな結婚生活のために。

04 - ピンクな妹 ノア 7才 - 後半（後書き）

主役級以外の名前が今回初めてでました。

ランスさんです。騎士で、やりなんかを使うイメージから名前を決めました。

基本的に文章がうまいとは言えないのでせめて名前や地名だけでも分かりやすくを心がけています。

「投稿・更新情報など」に次回更新情報を載せていますが週1更新くらいになりそうです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8156z/>

黒色な私、桃色な妹と親友

2012年1月1日02時48分発行